

第4章

「ものがたり復興」の要点

第1節 「ものがたり復興」を考察する

本章では、ものがたり復興に関する5つの論点について紹介する。いずれもプロジェクトで活発な意見が交換された事項であり、ものがたり復興の特色や可能性を示すものでもある。5つの論点とその概略は次のようなものである。

「り」の字をめぐる議論 - 「物語る」ことの意味

ものがたり復興は、「物語復興」と漢字ではなく、平仮名で表記している。それは「語る」「語り」という動詞(=行為)の意味もあることを表すためでもある。「り」の字がある(つく)ことの意味は大きい。

言葉の力をめぐる議論 - 総論と各論

ものがたり復興では、まず言葉でビジョン(物語)を描き共有する。これは復興による地域の将来像を、総論として合意・共有するというプロセスで、ここを優先すべきという考え方だ。具体的な事業(=各論)はその後で考えれば良いというスタンスに立つ。各論(事業)の積み重ねともいえる従来の復興計画との違いがここにある。

地域の見つめ直しをめぐる議論 - 過去と未来が交差する物語

復興が目指す地域の未来物語(=ビジョン)は、どこか懐かしさのある未来の物語になる。それは、住民が語りだす未来、望ましいと考える未来の根底には、その地域の歴史や文化があるからだ。復興ビジョンを考えることは地域を再確認することから始まる。そのプロセスに大きな意味がある。

オーガナイザーをめぐる議論 - 支援者のあり方

復興とは長期にわたるものであり、その主役は住民である。しかし住民にとって復興活動は初めての経験であり、また直接的な利害関係が発生することからも、外部の支援者・協力者が必要となる。支援者の立ち位置や支援の方法は大きな課題となる。

災害復興を超えて - 地域再生の方法論として

ものがたり復興は、被災という不幸な出来事から、被災者や被災地がどう再建・再生していくかという、復興プロセスについての考え方であり方法論である。自然災害による「被災」という事件がきっかけとなっているが、中山間地は災害がなくても疲弊している。人口減少や高齢化の進行で疲弊し危機的状況にある、中山間地の地域再生の方法論としての可能性について考えたい。

第2節 「り」の字をめぐる議論 - 「物語る」ことの意味

「物語る」ことで立ち上がる

ものがたり復興のプロジェクトでは「り」の字の議論というものがあつた。「物語」という名詞だけでなく、「物語り」と「り」の字を送り仮名としてつけて、動詞としての意味合いを含めて捉えるべきだという議論である。この「り」の字をめぐる議論は、実は重要な意味を持っている。

「物語」とは名詞であり、すでに形になったもの、定まった事象を指す。対して「物語り」と表記すると、「物を語る」という動詞の意味合いが強くなる。つまり行為を意味するものになり、「物語」よりも動的な言葉となる。被災者たちが「物語る」ことから復興が始まる。ものがたり復興ではそう位置付けられる。

サンタクルーズ市では300回を超えるワークショップが行われ、柏崎えんま通りでも毎週のように話し合いが行われた。被災した住民同士が顔をあわせて対話するというプロセスには、次のような効果があると考えられる。

「語る」ことで、被災という現実を受け止め、次に進む力が生まれる

被災という経験は辛く悲しいものであり、その現実を直視できない人や立ち上がる氣力を失う人も多い。そうした人たちが第一歩を踏み出す場やきっかけとして、「語る」ことが有効である。

精神療法の一つに「ナラティブ¹セラピー」という、患者に自由に話をしてもらう（物語ってもらう）ことで、症状を改善するという治療法がある。同様の効果を意図して、被災者に語りかけ、被災時の状況や現在の状況を語ってもらうことで、現実を受け入れ気持ちを整理するきっかけにするという手法が、多くの被災地で実践されている。

ものがたり復興でも、被災者自身が語り、対話する場や機会をできるだけ多く用意して語り始めてもらうことが、復興に向けての第一歩につながると考えている。

一人ひとりが語ることで、復興を自分のことと考える当事者意識が高まる

災害発生から避難生活、復旧過程など、時として被災者は当事者意識を失うことがある。圧倒的な自然の力、そして避難所や仮設住宅での生活において、

¹ ナラティブとは英語で「物語」と「語ること」という2つの意味をもつ言葉。

自分の意思に関係なく時間が過ぎていくことが多くなる。支援者や行政機関の指示に従う事に慣れてしまうと、将来についても自らが選択することを忘れ、復興が他人事（ひとごと）になってしまう。

復興は長期に及ぶ営みであり、それを進めるのは被災者自身である。その被災者が誰かの指示を待っていたのでは復興はおぼつかない。復興を自分のものとする当事者意識を高めるために、自分の言葉で地域の未来、望ましい物語を語ることの意味は大きい。

対話という形式がより良い物語を紡いでいく

復興ビジョンという物語をひとつの場で語り合うことが重要である。語る人と聴く人という関係性があることで、議論が深まり、意見の融合や止揚などを生み出し、物語がより豊かで魅力的なものになっていく。

こうしたことは、アンケートやパブリックコメントのような個人的な作業では起こりえないことだ。

未来への夢やビジョンを地域全体で共有しやすくなる

ワークショップなどを通じて様々な夢や意見を聞いたり対話したりすることで、世代や居住地区、職業を超えて、住民の考えていることがわかり、相互理解も進んでいく。こうした相互理解は、復興ビジョンの集約や共有に欠かせないものとなる。

こうした対話の経験は、実際の復興事業を進める上でも有効となり、住民の利害を考慮した事業を促すなど、住民間に新しい関係を生み出すことも期待できる。

物語が現実をつくる

サンタクルーズ市の復興では、中心市街地の将来の姿を住民の声で18ページの文章にまとめた。これが「物語」であり、その物語のキーワードとなったのが「Civic Living Room（市民のお茶の間）」である。物語とキーワードは、市民や行政機関が具体的な事業を考える際に、「お茶の間だから座る場所が必要になるので、ここにベンチをおこう」「人が集まってくるように映画館を作ろう」といったように、復興の指針となったわけである。

ものがたり復興では、こうしたことを指して「物語によって復興が進む」「復興に向けて人々は物語を生きる」と考える。そこには自分たちみんなで作った

物語を、みんなで実現するという行動・活動が欠かせない。

アメリカの心理学者ジェローム・ブルーナーは、現実の捉え方を「論理科学モード」と「ナラティブモード」の2つに分類した。前者は現実を客観的な観察が可能なものとする捉え方であり、例えば地震を震度6、マグニチュード7.2、震源地は柏崎市の沖合10km、といった形で理解する。現実を受動的に捉え、静的で変わらないものとする見方に立つ。

一方ナラティブモードは、人々が語ったことやそこから生まれた物語を現実として理解するという捉え方である。例えば、「ドーンという大きな音とともに突き上げるような揺れが襲った」集落中の人々が着のみ着のまま表に飛び出してきた」といったように、実感的で記憶に残った場面を中心に現実を捉え理解する。そこには、現実を主体的、動的に捉え、働きかけによって変わりうる、とする視点がある。

ものがたり復興とは、復興をナラティブモードで考え、こうあって欲しいという未来への物語を描き、それを実践していく(=現実にしていく)取り組みである。つまり「物語によって現実をつくりあげていく」ことである。

物語はみんなで共有できなければならないし、その実現は住民が主体的に取り組まなければならない。そのためにも、住民自身が「物語る」という行為が重要なのである。

第3節 言葉の力をめぐる議論 - 総論と各論

復興には「どういう地域にしたいのか」という、ビジョンや夢、地域づくりのコンセプトを示す「総論」と、道路の拡幅のために住宅をどのくらいセットバックするかといったような、住民間の利害に関わる「各論」がある。

第2章でも述べたが、行政主導で進むことが多い日本の復興活動では、個別の事業（＝各論）が中心になりがちである。またその事業の指針として、「原型復旧」つまり被災前に戻すという考え方がとられることが多い。

従来の復興計画でも目標や地域づくりの方向性は示される。しかしそれらは抽象的であり、個別の事業計画にどう反映していくかはあらためて考えなければならない。また被災前と大きく変えようとする、利害関係の調整に手間取り計画が進まない。その点、被災前にもどす（原型復旧）という考え方はわかりやすく住民にも納得されやすい。

こうしたことから、現状は復興計画とは言いながら、実際には復旧計画の色彩が強いことを指摘できる。行政は被災前に戻したので、ここからは地域や住民が取り組む、といった考え方が現在の復興計画の底流にあるように感じられる。

これに対してもものがたり復興では「総論」を重視する。「物語」という名の総論を構築することを重視し、個別事業という「各論」はそれぞれの主体に委ねればよいという考え方だ。

サンタクルーズ市でも当初は各論から議論を始めている。しかし利害が異なることもあって、だれもが好き勝手な発言をし、一つの案件すらなかなかまとまらない。ある時、堂々巡りの議論に辟易した誰かが「もうやめよう」と言い出した。「こんな議論をしてもしょうがないから50年後のことを考えないか」という提案が突破口となり、復興をめぐる本来的な議論が進み始めたという。

「総論」とは、この地域はこうあって欲しいという、将来へのイメージであり夢である。それならば専門家でなくても誰でも語るができる。また地域全体の夢でも一部に関わる断片的な夢でも構わない。そして、図面やパース図がなくても、言葉や文字という日常的なコミュニケーション手法で伝えればよい。総論から語り始めること、言葉で伝え合うことで、だれもが参加できる活動となる。

また言葉には「曖昧さ」という特性がある。「Civic Living Room」というキーワードは共有されても、それに対するイメージやアウトプットは共通ではない。一つに定まらず、それぞれがそれぞれの未来像を持つことになる。しかし方向性、向かうべきベクトルが一致すればそれでよい。曖昧さはかえって様々な意見を束ねるのに有効だし、そこから新たな取り組みを喚起するという効果もある。

復興活動を進める上での前提となるビジョンづくりとその共有、そのために言葉の力が果たす役割は大きい。

もう一点「総合性」という特色もあげられる。従来の個別事業計画中心の進復興活動では、各事業の遂行が優先され事業間の連携は難しくなる。これに対し、ものがたり復興ではビジョンやキーワードといった抽象的な目標が示されるだけなので、個別の事業には計画段階の制約が少なく、また連携が生まれやすい。例えば、「歩道を拡幅するならば、そこにベンチを置けないか」「街頭はベンチを照らすように配置しよう」といった具合である。

「Civic Living Room にしよう」「快適に過ごせる空間にしよう」という結論に向けて、じゃあどうするかと考え、複数の事業を組み合わせながら実現していく。そういった総合性を生み出すことも、ものがたり復興の目指すことである。

サンタクルーズ市では50年先のまちを「総論」として設定した。つまりその実現のために、復興のための事業(=各論)は50年かけてじっくり取り組もうという事でもある。中越大震災の被災地でも、ある地域のリーダーが地区の復興に関して「復興ビジョンは時間をかけてでも全員の合意を目指して議論する。その後の事業は民主的に(多数決)進める」と発言したという。

様々な利害が関わる事業(各論)はどうしても対立が生まれるし、理想論だけでは進まない。しかし大きな合意(総論)があることで、対立を解決する議論が始められるし、理想と現実の落とし所についても考えられる。これもまたものがたり復興の特色である。

第4節 地域の見つめ直しをめぐる議論 - 過去と未来が交差する物語

ものがたり復興では、過去・現在・未来の時間軸が交差し長良、物語が構築され、活動が展開される。

一つは未来から現在に向かう時間である。これは言うまでもなく、未来にこうありたいという地域の姿、ビジョンを定め、その時点から現在に向けて何を行うべきかを考え、事業や活動を計画していくという時間の流れである。

従来の復興計画は、現在を起点として被災前という過去に向かう、そこに戻ることを想定する。被災前の過去に戻るのに要する時間が、計画で考えるべき未来であり、そこまでの未来しか考えない、というわけである。そこには過去に戻る方法(=復旧)は描けても、その先の未来(=復興)は描かれていない。

現在から過去に向かう矢印の出発点を未来にずらし、現在に向けて伸ばすこと。こうすることで被災地の現在を位置づけられ、取り組むべきことも見えてくる。時間軸をずらすというこの視点は、ものがたり復興の骨格をなす考え方の一つである。

もう一つ、ものがたり復興には過去から未来に向かう時間軸がある。被災地が考える未来とは、その地域の歴史や文化、ライフスタイルの集積(=過去)の延長上にあるべきだからである。逆に言えば、過去の延長上でしか未来は描けない。

サンタクルーズ市の「Civic Living Room」は、ある日突然でてきたキーワードではなく、中心市街地(パシフィック通り)はもともとそういう機能を持っていた。それを「Civic Living Room」という言葉に置き換えて表現した。その言葉がぴったりだったために、共感と共有が広がったわけである。

つまり復興の物語はまったく新たに生まれるのではなく、地域を見つめ直し過去を再確認する中から浮かび上がってくるものである。そうでなければ住民が共感も共有も出来ない。えんま通りの復興ビジョンが、「新生！えんま通り」と掲げつつも、「未来に向かって歩み続ける、えんま堂と共に懐かしく」というサブタイトルとともに未来と過去が同時に表現されているのは、そうした地域への思いによるものだろう。

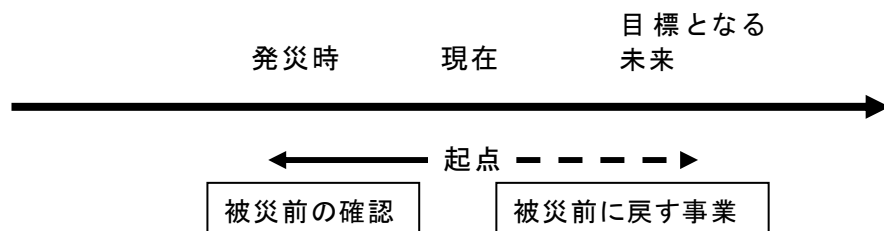
中越大震災の被災地では、集落ごとに復興計画を策定する「復興デザイン策定活動」が展開され、60を超える集落で取り組まれ、計画に基づく自立的な復興活動が進められている。そのデザイン策定活動で最初に行われたのは、自分たちの集落の宝物(地域資源、魅力、歴史・文化等)を見直すこと、つまり過去を確認することだった。それにより、被災地は自らのアイデンティティを再確認し、誇りを取り戻す。そしてその延長上であるべき復興の姿を描いていくという、まさにものがたり復興のプロセスで復興が進んでいる。

被災地が目指すべき未来の物語は、もともとそこにあるのだ。その地域の過去を見つめ直し、整理し、好ましい未来をイメージして言葉に置き換えていく。それが

ビジョンになり物語になっていく。過去の中に未来の物語があり、過去を見ないでは未来への物語は見えてこないのである。

従来の計画における時間軸

現在を起点として、被災前までの過去に遡り、そこに戻るまでを未来として捉える。時間軸の幅は狭く、事業量によって目標点が決定される。



ものがたり復興における時間軸

中長期の未来を起点として、その目標を達成するための取り組みを、現在に遡る形で計画を考える。未来を考えるために地域の歴史（過去）に遡る。時間軸の幅は大きく、目標点は自在に設定できる。

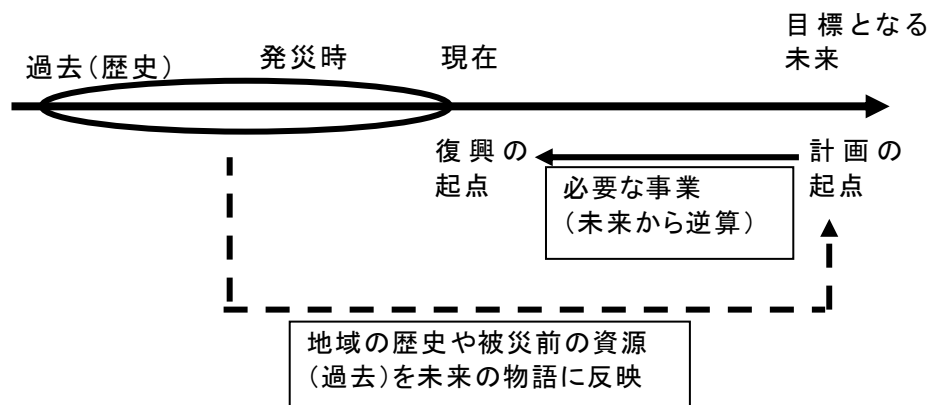


図 4-4-1 ものがたり復興における時間軸

第5節 オーガナイザーをめぐる議論 - 支援者のあり方

必要な支援は段階に応じて変化する

被災者にとって災害復興は初めての経験であり、また長期的な地域づくり計画に関与したことがある住民は限られる。地域計画や建築家、広報・コミュニケーションの専門家なども、都市部ではまだしも中山間地では少ないのが実情である。したがって、ものがたり復興を進める際に、様々な場面で専門家や研究者、中間支援組織のメンバーなどの応援・支援が必要となる。

しかしその支援のあり方は、住民の主体的な取り組みを引き出すようなものでなければいけない。また計画策定の段階によって必要となる支援は異なるため、支援者(専門家)が段階やテーマによって交代することなども視野に入れる必要がある。

計画策定の流れと必要な支援、支援に関するポイントは以下のように整理できる。

表4-5-1 ものがたり復興と支援者

段階	必要となる支援	支援者・活動のポイント
1. 計画検討・策定 組織の発足	<ul style="list-style-type: none"> ・検討・策定活動の核となる住民グループの形成 ・検討・策定活動の計画(プログラム)づくり支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・住民との信頼関係 ・計画策定やプロジェクト・マネジメントのスキル
2. 住民の夢や声の 収集(対話活動)	<ul style="list-style-type: none"> ・対話活動の実施・進行サポート ・ワークショップのファシリテーション ・対話集会等の記録や発言整理のサポート 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションや調査、ワークショップのスキル ・テーマに応じた資料作成の知識やスキル
3. キーワードやビジ ョンの取りまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・収集した発言の整理・分類・集約 ・策定組織に対する専門的なアドバイス、情報提供 ・ビジョンやキーワードの言葉探しへの協力 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションや計画策定に関するスキル ・プランナーなど地域計画の専門家
4. 復興計画の策 定・取りまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ビジョンの共有のための取りまとめ支援 →ゾーニングやガイドラインの検討・提案 等 ・共有や理解促進のための広報活動支援 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域計画や建築、空間デザインなどの専門スキル ・広報や制作のスキル
5. 個別事業計画の 評価や策定	<ul style="list-style-type: none"> ・個別事業計画の評価(ビジョンとの整合性) ・修正や変更点に関する提案・助言 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域計画や建築、空間デザインなどの専門スキル
(参考) 個別事業の支援	<ul style="list-style-type: none"> ・復興のための個別事業の推進協力 →助言やネットワーク紹介、実施協力 等 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画支援ではなく復興活動の支援

初期の段階は復興計画策定に向けての、計画や活動をデザインする知識やノウハウに関する支援が必要となり、それに対応する支援者が期待される。ただしそれよりも重要なのは、住民をその気にさせることだ。被災と言う辛い経験、避難所や仮設住宅での慣れない毎日、復興というかつて経験した事のない活動への戸惑いなど、それらすべてを乗り越えて、住民の背中を押し、最初の第一歩を踏み出してもらうことから、ものがたり復興が始まるのである。

そのためには地域住民との信頼関係が不可欠である。被災地に通って住民の話を聞き、時には農作業や行事に参加する。そうした積み重ねの中で、地域の復興への取り組みについて語りかけ、行政に頼るだけではない自立復興について一緒に考えていく。地域に話を聞いてもらえる関係の形成が、支援者に求められる最初の条件であり、最も重要な要件と言える。

専門家やネットワークを動かすオーガナイザー役が重要

ワークショップ等を通じて住民の夢や物語を集める段階では、話を上手に引き出すことが必要であり、ワークショップやコミュニケーション、調査の専門家などの協力や支援が有効になる。また議論を深めるために、街並みの模型やイメージスケッチ、他地域の事例や画像など、検討資料を用意できる専門家の支援も考えたい。

次のビジョンやキーワードの整理と取りまとめの段階では、住民の策定組織に寄り添って適切なアドバイスを行い、物語を形作っていく支援を行うことになる。地域計画に詳しいプランナーや建築家などの他、コピーライターのような言葉の専門家の協力も考えられる。

復興ビジョンや物語を目に見える形にしていく、つまりゾーニング計画やガイドラインを策定する段階では、やはり建築計画や空間デザインなどの専門家の力が欠かせない。またビジョンの共有や理解促進のためには、広報的な視点やアドバイス、制作物管理ができる支援者も必要となる。

最後の個別事業計画の評価やチェックについては、図面等を基に判断する点や改善点や修正の方向を指摘できるような専門家の支援が必要になる。こうした専門家がいることで、個別の事業（各論）段階に入っても、復興ビジョンや物語の方向性（総論）との整合性を確保できることになる。

このように段階に応じて必要となる専門性が変わるのだから、住民組織を支援する専門家も変わっていく方がよいと考えられる。その時々に必要な知識やスキルを持った専門家と連携して、計画策定や復興活動を進めていくことは理想的とも思える。

しかし単に各段階に必要な知識や経験、技術を持っているだけでは、実は十分ではない。復興ビジョンが生まれてきた背景やそこに至る議論、地域の状況を理解し

た上で、すなわち物語を十分に理解した上で助言や提案を行うという構造にしなければ、地域の望む復興は実現しない。

その点では最初から一貫して被災地に関わり、ビジョンや物語の背景、目指すところを理解した支援者が重要になる。住民あるいは計画策定組織と信頼関係をもち、復興計画全体を理解して、適切な助言を行うオーガナイザー（取りまとめ役）である。段階に応じて必要な専門家や支援を確保・招聘し、それまでの経緯をオリエンテーションする。また住民や組織に提案する前の段階で相談や協議を行い、時として修正を依頼する。支援者や支援組織の中に、こうした機能を果たすオーガナイザー役を期待したい。

第6節 災害復興を超えて - 地域再生の方法論として

サンタクルーズ市や柏崎市など、これまで紹介してきたものがたり復興の事例は、いずれも地震災害からの再生・復興の取り組みであった。いずれも地震によって壊滅的な被害を被った地域が、望ましい未来の物語を共有することで、復興を実現していこうという災害復興の事例である。

このものがたり復興の手法は、災害からの復興だけでなく、様々な地域の再生や復興（地域復興）の手法としても利用できるのではないかと考えられる。

まちの構造や生活行動の変化、モータリゼーションの進行などによって、顧客が減り、シャッター商店街となっている中心市街地や商店街は全国に広がっている。建物こそ残っているがその衰退した姿は、被災したえんま通りに重なってくる。人口減少や高齢化が進行し、限界集落が議論される中山間地は、いわば「社会変化」という目に見えない災害に直面していると言えなくもない。衰退する商店街や中山間地の集落は、再生や復興に向けての一步を踏み出さない限り復興することはない。それはまさに災害からの復興と同様といえる。

中越大震災の被災地で行われ、その成果が現在も復興活動に引き継がれている「復興デザイン策定事業」では、プロジェクトに参加しているメンバーが関わり、ものがたり復興の手法を実践している集落もある。なかにはそれほど大きな被害を受けてはいないが、事業を活用して地域復興や持続可能な地域づくりを目指すという事例もある。

ものがたり復興とは、災害復興だけでなく、全国の疲弊した地域や集落が再生する地域復興の手法としても活用できるのではないかと考える。今後そうした観点からの研究も必要ではないかと考える。